

明治7年（1874年）榊原十兵衛氏がほか17名をけん引し富岡製糸場に養蚕、養糸を習得すると共に、松ヶ岡の養蚕場を建設しました。明治8年、9年と都合3年間に亘り研修員を派遣し、女工40名を鶴岡に連れて来ました。

明治時代の基幹産業はお茶と絹織物が輸出の大半を占めておりましたので、旧藩士3,000名の生活を守る政策として宇治の茶種を松ヶ岡の開墾地に斡旋したのが、天保十五年（1844年）静岡県佐野郡八坂村（現掛川市）に石神徳重の次男として生まれ、その後明治7年（1874年）に七日町の齋藤家に婿入りした齋藤庄蔵氏でした。

齋藤庄蔵氏は菅原道真の末裔の菅 実秀氏に認められ当初宇治茶を斡旋するも土地に馴染まず、次に静岡茶を斡旋するも、松ヶ岡の地には根づかず、桑の木を斡旋し鶴岡の絹産業の発展に貢献されたのでした。その末裔が鶴岡市本町三丁目（元・元曲師町）の菓子屋遠州屋五代目齋藤進氏で菅家13代当主菅 秀二氏と齋藤 進氏の対談は意義あるものでした。

戦後化学繊維に押された絹織物産業も大和匡輔氏等の努力により光明が見えつつあり、2001年に誘致した慶応義塾大学先端生命研究所より「くもの糸」のスパイバーを生み出し、その他研究所から幾多の新しい産業が巣立っていることに夢を追いかけ「スーパーサイエンス」学園都市発展に賭けているこのごろです。

令和5年7月7日